

教育研究業績書

2017年05月29日

所属：健康・スポーツ科学科

資格：准教授

氏名：坂井 和明

| | |
|------------------|-----------------------------|
| 研究分野 | 研究内容のキーワード |
| コーチング学 | 球技、技術・戦術、コーチング、質的研究 |
| 学位 | 最終学歴 |
| 博士（体育科学）、修士（体育学） | 筑波大学大学院 体育科学研究科 博士後期課程 満期退学 |

| 教育上の能力に関する事項 | | |
|------------------------------|-----|----|
| 事項 | 年月日 | 概要 |
| 1 教育方法の実践例 | | |
| | | |
| 2 作成した教科書、教材 | | |
| | | |
| 3 実務の経験を有する者についての特記事項 | | |
| | | |
| 4 その他 | | |
| | | |

| 職務上の実績に関する事項 | | |
|--|-----|----|
| 事項 | 年月日 | 概要 |
| 1 資格、免許 | | |
| 1. 財団法人日本体育協会公認上級コーチ（バスケットボール） 2. 財団法人日本スキー連盟公認1級 3. 財団法人日本バスケットボール協会公認コーチ | | |
| 2 特許等 | | |
| | | |
| 3 実務の経験を有する者についての特記事項 | | |
| | | |
| 4 その他 | | |
| | | |

| 研究業績等に関する事項 | | | | |
|--|---------|------------|-------------------|--|
| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
| 1 著書 | | | | |
| 1. バスケットボール指導教本「改訂版」上巻 第5章 シューティングの指導 | 共 | 2014年8月20日 | 大修館書店 | 本書は、公益財団法人に本バスケットボール協会が編集する指導教本である。指導教本の改訂にあたり筆者が担当する「シューティングの指導」の章は、従来の指導教本における章内の小項目から章へ格上げし、大幅な書き直しを行った。「シュート指導の方向性」「基本的なシュート」「ワンハンドショット」の3項で構成し、日本バスケットボール界の更なる発展のために、国内の女子指導において問題となっているボースハンドシュートの項を削除し、改めて目標像としてのワンハンドシュートのメカニズムを詳細に記述し、発育発達の見点を加えた指導方法についても提案を行っている。 |
| 2. スポーツ科学・医学大事典 スポーツ運動科学ーバイオメカニクスと生理学ー | 共 | 2010年10月 | 西村書店 | 阿江通良，河野一郎，高松薫，徳山薫平（監訳）本書は、生化学，運動生理学，基礎医学等の基礎科学から，臨床医学のトピックス，バイオメカニクス，応用生理学等の応用化学に至るまでををれなく包括的，体系的にカバーするとともに，スポーツ科学の今日的課題を浮き彫りにしている。 |
| 3. バスケットボール ポストプレーのスキル&ドリル | 共 | 2009年03月 | 大修館書店 | 鈴木淳 ポストプレーヤーの特性とプレーの原則、ローポストとハイポストからの得点方法、オフenseとディフェンスのリバウンドの技術とフットワークなど、ポストプレーに必要な技術・戦術、練習方法を網羅して解説する。 |
| 4. 最新スポーツ科学事典 | 共 | 2006年09月 | 平凡社 | ・日本体育学会（監修）約400名分担執筆。 ・本書は、体育学とスポーツ科学の各分野から、キー概念となる大項目（約500）を立項して50音順に配列した。さらに大項目のもと、関連する具体的な用語を小項目として配列している。体育哲学・体育史・体育社会学・体育経営管理・体育心理学・運動生理学・バイオメカニクス・発育発達・体育方法・測定 |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称 | 単著・ 共著書別 | 発行又は 発表の年月 | 発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称 | 概要 |
|--|-------------|---------------|-------------------------------|---|
| 1 著書 | | | | |
| 5. スポーツ医学検査測定ハンドブック | 共 | 2004年12月 | 文光堂 | 評価・体育科教育学・保健・スポーツ人類学・スポーツ法学・スポーツ医学。項目ごとに参考文献を付した。 臨床スポーツ医学編集委員会 本書は、スポーツ医学領域の検査測定について、幅広く取り上げ、整理するものである。 本人分担執筆は、体力・運動能力・競技能力の測定 種目別体力特性の測定と実際 球技 バスケットボール である。 |
| 6. 中学校体育・スポーツ教育実践講座 | | 1998年02月 | 大修館書店 | (成田十次郎・川口千代・杉山重利(監修)) □本書は、21世紀の中学校における体育科教育の在り方を、実践と理論の両面から体系化したものである。坂井分担部分は、中学校のクラブ指導におけるパソコンの有効利用法を、トレーニング理論および戦術理論に基づいて、実践的・具体的に紹介している。 □・本人分担：第15巻 体育の学習指導と経営に生きるパソコンの活用 第3章 運動部活動とパソコン 第3節 パソコンを利用した記録・能力分析 バスケットボールの競技力向上のための記録・能力分析。 |
| 7. 教師のための運動学 | 共 | 1996年04月 | 大修館書店 | 金子明友(監修)、三木四郎、吉田茂(編著)、他20名分担執筆。 ・本書のねらいは、スポーツ運動学の基礎理論を、各競技スポーツの具体例を挙げながら、指導現場への応用と活用ができるようにしたところになる。坂井分担部分は、技術・戦術、戦術の階層性、局面構造といったバスケットボールの指導方法論を、スポーツ運動学的視点から導き出している。 |
| 8. シリーズ [トレーニングの科学] エンデュランストレーニング | 共 | 1994年10月 | 朝倉書店 | トレーニング科学研究会(編)、他34名分担執筆。 ・本書の特徴は、エンデュランス(持久力)のトレーニング法を、スポーツ医学的基礎理論と、各競技スポーツの指導現場における実践および課題の両面から具体的に明らかにしたところにある。坂井分担部分は、バスケットボールを例に、球技スポーツのエンデュランストレーニングの目標像、トレーニング課題の明確化、トレーニング手段の準備について実践例を挙げてスポーツトレーニング学的視点より説明した。 |
| 2 学位論文 | | | | |
| 1. 球技スポーツ競技者における間欠的運動パフォーマンスのトレーニング課題に関する研究 | 単 | 2006年2月 | 平成17年度 筑波大学大学院 博士課程 人間総合科学研究科 | 本研究は、球技スポーツの特殊持久力である間欠的なハイパワー発揮能力に焦点を当て、間欠的なハイパワー発揮能力とエネルギー産生能力との関係、球技スポーツの競技力を反映した体力特性の評価法、間欠的なハイパワー発揮能力のトレーニング課題、および間欠的なハイパワー発揮能力を高める個別性の原則を考慮したトレーニングの効果について検討することを目的とした。本研究の結果から、間欠的運動パフォーマンスのトレーニングを効果的に実施するためには、動作様式を考慮したフィールドテストを実施⇒無気的能力と有気的能力の優劣からみた体力特性のタイプ分け⇒トレーニング課題を個人ごと、あるいはタイプごとに設定⇒タイプに応じたトレーニング手段の準備⇒トレーニングの計画および実施⇒効果の評価という一連のトレーニング手順に従うことが有効であることを示唆した。また、間欠的運動パフォーマンスのトレーニング課題は、無気型群が回復能力を高めるためのO2系の能力の改善、有気型群が一回一回の動きの中で発揮するパワーそのものを高めるためのハイパワー発揮能力の改善になることが明らかにした。 |
| 3 学術論文 | | | | |
| 1. バスケットボールにおける即興的な攻撃戦術に関する質的研究：国際レベルで活躍したプレイヤーの語りを手がかりに | 共 | 2013年3月 | 健康運動科学 | 坂井和明・鈴木淳 本論文は、即興的かつ効果的にプレイ経過を創出するタイプの攻撃戦術であるフリーランスを採用して国際的に高い指導実績を残している国内トップコーチの成功事例の特徴を行為者であるプレイヤーの視点から明らかにすることを目的とした。 本論文の結果、1. バスケットボールにおけるフリーランスには、個々のプレイヤーの動きにルールを設定することで個人戦術を効果的に連続させるタイプと、チームを2対2や3対3の部分集団に分けて階層的に認識し個々のプレイヤーの個性を生かすグループ戦術を素材にプレイ展開の予測を共有するタイプがあることを示唆した。2. 速攻場面とセット場面とに分けて攻撃開始局面の拘束条件を生み出すルールを設定していたこと、攻撃の開始方法はポイントガードのプレイに他のプレイヤーが連動する方法と、ポイントガード以外のプレイヤーがグループ戦術を先 |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称 | 単著・ 共著書別 | 発行又は 発表の年月 | 発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称 | 概要 |
|--|-------------|---------------|-----------------------|--|
| 3 学術論文 | | | | |
| 2. バスケットボール競技における3ポイントシュート成功率と重心変位との関係：大学女子プレーヤーを対象として | 共 | 2011年3月 | 健康運動科学 | <p>に仕掛けてシュートチャンスを創り出す方法の2種類があったことを示唆した。 ・共同研究につき本人分担部分抽出不可能</p> <p>坂井和明・白井敦子 本論文は、3ポイントシュート動作における重心運動を、シュート成功率の高い熟練群と低い非熟練群間で比較することにより、重心変位とシュート成功率との関係を明らかにすることを目的とした。その結果、 1. 重心変位は、垂直方向と水平方向のいずれにおいても、全ての局面において熟練群が非熟練群よりも有意に小さい値を示した。 2. シュート成功率と、垂直方向の「④セット→リリース局面」、「セット→最大局面」、水平方向の「③構え→セット局面」の重心変位との間に、有意な負の相関関係が認められた。 本論文の結果、高度な正確性が要求される3ポイントシュートのコーチングにおいては、垂直方向および水平方向のいずれにも大きな重心の移動を伴わずにシュートする動作を指導することの重要性を示唆した。</p> |
| 3. 私の考えるコーチング論 | 単 | 2011年10月 | コーチング学研究 | <p>本論文は、競技スポーツのコーチングの中でも特に球技のコーチングに焦点を絞りを、 1. 球技のコーチングとは 2. 球技のコーチングにおける仕事と行動および思考 3. コーチの資質と能力 4. コーチング哲学とコーチ像 5. コーチングの理論体系 について解説した。 本論文の結果、コーチングは、科学の領域よりもむしろ技術の領域に属する行為であることを指摘し、課題解決型思考のコーチングフローに沿って、目標論、評価・診断論、手段論、計画論、実践論のように、各手順の目的を達成するための技能、手順（技法）、道具および知識の体系を整理することによって、コーチング学の理論体系を構築することが可能になることを示唆した。</p> |
| 4. 球技スポーツ競技者の間欠的なハイパワー発揮能力 | 単 | 2010年3月 | フットボールの科学 | <p>本論文は、球技の専門的持久力を、影響する要因、評価方法、トレーニング課題の設定法、トレーニング効果、という4つの視点から検討することによって、球技の専門的持久力の効果的なトレーニング法を明らかにすることを目的とした。本論文の結果、専門的持久力の強化のためには、「動作様式を考慮したフィールドテスト実施→体力特性のタイプ評価→タイプごとのトレーニング課題の設定→タイプごとのトレーニング手段の準備→タイプごとのトレーニング計画および実施→効果の評価」という一連のコーチングフロー（手順）に従うことが有効であることを示唆した。</p> |
| 5. 移動手段としての階段利用の推奨が身体活動の強度および量に及ぼす影響—若年女性を対象とした予備的検討— | 共 | 2010年10月 | 健康運動科学 | <p>松本裕史・坂井和明・伊達萬里子・田嶋恭江 本論文の目的は若年女性を対象に、移動手段としての階段利用を中心とした日と昇降機利用を中心とした日との強度別の身体活動量を比較することによって、階段利用の推奨が身体活動の強度および量に及ぼす影響を予備的に検討することであった。その結果、階段使用を中心とした日は昇降機利用を中心とした日と比較して、中強度の身体活動量、総エネルギー消費量、運動量および歩数が有意に多かった。本論文の結果、移動手段としての階段利用の推奨は、中強度の身体活動力だけでなく、総エネルギー消費量や運動量を増加させる可能性があることを示唆した。</p> |
| 6. 健康・スポーツ科学の科目と資格に対する学生ニーズ | 共 | 2010年03月 | 武庫川女子大学紀要（人文・社会科学） | <p>中村哲士、坂井和明、松本裕史、濱屋桃子、田中繁宏 本研究の目的は、本学科における教育内容の再検討に際してその資料を得ることを主目的に、設置している専門科目と取得可能資格に関して再度学生ニーズ調査をし、学年間に存在する意識の違いについて分析しようとするものであった。</p> |
| 7. 女子大学生の身体不活動を規定する心理的要員の縦断的検討 | 共 | 2008年03月 | 大学体育学 | <p>松本裕史、坂井和明、野老 稔。 本研究の結果から、身体不活動な女子大学生に対してトランスセオレティカル・モデル（TTM）に基づいた身体活動介入を行う場合、女子大学生特有の反応を考慮した介入アプローチを行う必要性が示唆された。</p> |
| 8. 球技スポーツ競技者における個別性の原則を考慮した体力トレーニングの効果 | 共 | 2006年08月 | 体育学研究 | <p>坂井和明、伊藤竜兵、大高敏弘、高松 薫 ・本論文の目的はバスケットボールチームを例に、全員に同一トレーニングを実施した場合と、トレーニングの手順に沿いながら個別性の原則を考慮した</p> |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称 | 単著・ 共著書別 | 発行又は 発表の年月 | 発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称 | 概要 |
|---|-------------|---------------|-----------------------|---|
| 3 学術論文 | | | | |
| 9. コーチングスキル構築のための基礎的研究：体育系女子大学生が描く理想的なコーチ像を手がかりに | 共 | 2005年03月 | スポーツ方法学研究 | <p>タイプ別トレーニングを実施した場合における、間欠的なハイパワー発揮能力に対するトレーニング効果を比較検討した。</p> <p>野老 稔、坂井和明 本研究は、効果的なスポーツコーチングスキルを構築するために、体育系女子大学生が描く理想的なコーチ像を明らかにすることを目的とした。本研究の結果から、スポーツコーチングスキルの構築には、「どのような関係を構築するか」という視点、ならびに、その関係を構築するためのコミュニケーションスキルの必要性が示唆された。</p> |
| 10. 若年女性における主観的健康感と健康行動セルフ・エフィカシーとの関連 | 共 | 2005年03月 | 武庫川女子大学紀要（人文・社会科学） | <p>松本裕史、坂井和明、野老稔、田中繁宏、相澤徹、會田宏、小柳好生、中村真理子、四元美帆 本論文の第一の目的は、健康行動セルフ・エフィカシーを測定する尺度を作成することであった。その結果、健康行動セルフ・エフィカシー尺度は1因子6項目からなり、信頼性及び妥当性を有する尺度であることが明らかになった。</p> |
| 11. 球技選手における間欠的なハイパワー発揮能力のトレーニング課題に関する研究：エネルギー産生能力のタイプに着目して | | 2000年03月 | 体育学研究 45巻2号 | <p>（坂井和明・水上一・斉藤一人・John Sheahan・高松薫）□本論文は、間欠的なハイパワー発揮能力を、無気的能力と有気的能力の優劣から見たタイプの相違と関連づけて捉えることによって、球技スポーツにおける特殊持久力のトレーニング課題を明確化するための基礎的知見を得ることを目的とした。本論文の結果、球技スポーツ選手の特殊持久力のトレーニング課題を明確化していく際には、各種目の特徴と目指す戦術を考慮しながら、無気的能力と有気的能力から見たタイプの相違をもとに、個人毎に間欠的なハイパワー発揮能力の限定要因を明確化し、それに見合ったトレーニング課題を設定していく必要があることを示唆した。共同研究につき本人分担部分抽出不可能。全（pp. 239～251）（pp. 239～251）</p> |
| 12. 初動負荷法によるレジスタンストレーニングの生理学的特徴とパフォーマンスに対する影響 | | 1999年03月 | 日本女子体育大学紀要 29巻 | <p>（村夏実・坂井和明・大門芳行・根本勇・小山裕史・岩竹淳・鈴木朋美・小田宏行・黒田善雄）□本論文は、1）初動負荷法（Ballistic Type Resistance Training）と終動負荷法によるレジスタンストレーニング実施中の生理学的応答の比較、2）短期間の初動負荷法によるトレーニングが関節の可動域に及ぼす影響、3）ウォーミングアップとしての初動負荷法がパフォーマンスに及ぼす影響、の3点について検討した。共同研究につき本人分担部分抽出不可能。全（pp. 102～111）（pp. 102～111）</p> |
| 13. コーチの選手評価と統計分析の接点 | | 1998年12月 | 東京体育学研究1998年度報告 | <p>（小林敬子・坂井和明・青山昌二）□本論文は、バスケットボールを例に、コーチが選手の競技力を主観的にどのように評価しているかを、統計的手法（主成分分析、重回帰分析）を用いることによって明らかにすることを目的とした。本論文の結果、コーチは選手の競技力を評価するに当たって、選手の心理的、体力的、戦術的、技術的特性の単なる総和を競技力と見なしているわけではないことが明らかになった。コーチは、選手の戦術的な能力に主眼をおき、次に競技者としての基本的な資質に注目している様子が明らかになった。共同研究につき本人分担部分抽出不可能。全（pp. 1～5）（pp. 1～5）</p> |
| 14. 間欠的なハイパワー発揮能力と3種のエネルギー産生能力との関係 | | 1998年08月 | 体力科学 48巻4号 | <p>（坂井和明・Joho Sheahan・高松薫）□本論文は、ラボラトリーテストに加えて、球技スポーツの運動様式を考慮したフィールドテストを用いて、間欠的なハイパワー発揮能力と3種のエネルギー産生能力との関係について検討した。本論文の結果、ハイパワーを完結的に発揮するためには、前提条件として02系の能力に優れる必要があること、また、02系の能力では、最大酸素摂取能力よりも最大下運動の持続能力の方がより大きな影響を及ぼすことを明らかにした。したがって、球技スポーツのスタミナを高めたい場合には、ハイパワーの発揮能力そのものを高めるトレーニングと同時に、回復力としての02系の能力を高めるトレーニングが必要であることを示唆した。共同研究につき本人分担部分抽出不可能。全（pp. 453～466）（pp. 453～466）</p> |
| 15. ボールゲームの試合におけるチームの競技力構造の分析ーバスケットボールの場合ー | | 1998年03月 | 日本女子体育大学紀要 28巻 | <p>（坂井和明・大門芳行・小林敬子）□本論文は、バスケットボールを例に、ボールゲームにおける個人の達成とチームの達成を数量化して把握し、試合におけるチームの競技力構造を明らかにするための基礎的知見を得ることを目的とした。本論文の結果より、得点以外のプレーをプラス貢献のプレーとマイナス貢献のプレーに分類し、各プレーにプラスとマイナスのポイントを与えることによって、試合における個人の達成度とチームの達成度を数量化し</p> |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
|---|---------|------------|--|--|
| 3 学術論文 | | | | |
| 16. 球技スポーツ選手の体力特性の評価法に関する研究—動作様式を考慮したフィールドテストを用いて— | | 1997年05月 | 臨床スポーツ医学 14巻15号 | て把握することができた。また、主成分分析の手法を用いることによって、試合の勝敗に対して、個人がどのような機能を果たしたかを明確に把握し、試合におけるチームの競技力構造を明らかにできる可能性を示唆した。共同研究につき本人分担部分抽出不可能。全 (pp. 17~26) (pp. 17~26) (坂井和明・大門芳行・根本勇・黒田善雄) □本論文は、大学女子バスケットボール選手を対象に、生理学的指標を用いるラボラトリーテストと、運動パフォーマンスを指標に用いるフィールドテストの両者を実施し、球技スポーツ選手の競技力と直結した体力特性を評価するための適切な評価方法を明らかにすることを目的とした。本研究の結果より、球技スポーツ選手の競技力と直結した体力特性を適切に評価するためには、ラボラトリーテストよりも、スポーツ運動学における運動構造研究を踏まえた、球技スポーツの動作様式を考慮したフィールドテストの方が適していることを明らかにした。共同研究につき本人分担部分抽出不可能。全 (pp. 567~572) (pp. 567~572) |
| その他 | | | | |
| 1. 学会ゲストスピーカー | | | | |
| 1. 1. スクラップ・アンド・ビルド—チーム作り試行錯誤の軌跡 2. バスケットボール研究についての提案 | 単 | 2016年8月9日 | 日本バスケットボール学会 サマーレクチャー 2016 (第二回サマーレクチャー) | 省察しながらチームを創る 1) PDCAサイクルを回しながら 2) 球技のトレーニング計画の難しさ 目指すバスケットボール像の変化 1) San Antonio Spurs 2013-14 |
| 2. 『私のトレーニング計画とその実践』 | 単 | 2016年3月14日 | 日本コーチング学会第27回大会 (兼) 日本体育学会体育方法専門領域研究会第9回大会 | 球技のコーチングにおいてトレーニング計画を立案する場合、①チームが複数のプレイヤーによって構成される集団であること、②ゲーム構想→チーム→戦術→グループ戦術→個人戦術→個人技術→基礎的運動能力→体力要素…という複雑な階層構造をとること、③短期決戦のトーナメント戦と長期のリーグ戦の両方に備えること、の3点に対応しなければならない。 ①については、学年進行に伴うコンディショニングやスキルレベルに差があること、怪我人のリハビリテーションを別スケジュールで行う必要がある。②については「戦術的ピーキング」とでも表現できる、目標とする試合にチームの仕上がりが「間に合うか」を計算する絶妙な距離感が必要になる。③一般的準備期から試合期へと進める一般的な直線型のピーキングと、数週間ごとに課題を変化させながら部分練習と全体練習とを繰り返しながらチーム力を高めていく螺旋型のピーキングの両方が必要になる。 |
| 2. 学会発表 | | | | |
| 1. 大学女子バスケットボール選手の傷害発生について—3年間の調査より— | 共 | 2006年09月 | | 山本嘉代, 小柳好生, 坂井和明, 相澤徹, 田中繁宏, 野老稔 大学女子バスケットボールチームノ練習内容および傷害発生状況を調査し、競技力向上と傷害予防に役立つ情報を得ることを目的とした。本研究の結果から、受傷部位は足関節が最も多く、内再受傷も多数認められることが明らかになった。 |
| 2. バスケットボール選手の特性のMDSによる分析—チーム構成への応用— | | 1999年09月 | | (小林敬子・坂井和明・岡太彬訓) □バスケットボールを例に、競技スポーツのコーチが、選手の競技力構造を主観的にどのように把握し、チーム構成を行っているかを、多次元尺度構成法 (MDS) を用いて客観的に明らかにすることを目的とした。本研究の結果から、コーチが選手の心理的、体力的および技術的側面などの個別の特性を基に、経験的・主観的に選手を幾つかのタイプに分類して把握し、チーム構成や選手起用に生かしている事を、MDSを用いて客観的に明らかにすることができた。 |
| 3. バスケットボール選手の特性のMDSによる分析—5段階、3段階法の比較— | | 1999年09月 | | (小林敬子・坂井和明・岡太彬訓) □バスケットボールを例に、競技スポーツのコーチが、選手の競技力構造を、多次元尺度構成法 (MDS) を用いて把握する場合に、5段階法と3段階法のいずれが適しているかについて検討した。本研究の結果から、解釈上あるいはコーチの判断のしやすさのいずれにおいても、3段階法の方が適していることが明らかになった。 |
| 3. 総説 | | | | |
| 4. 芸術 (建築模型等含む) ・スポーツ分野の業績 | | | | |
| 1. 全日本学生バスケットボール選手権大会 第5位 | | 2010年11月 | | 武庫川女子大学バスケットボール部コーチ |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
|---|--|-----------|-------------------|--|
| 4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績 | | | | |
| 2. 全日本学生バスケットボール選手権大会 第3位 | | 2008年11月 | | 武庫川女子大学バスケットボール部コーチ |
| 3. 第24回日本女子学生選抜バスケットボール大会 第3位 | | 2007年07月 | | 関西選抜チームコーチ |
| 4. 第28回関西女子学生バスケットボール選手権大会 準優勝 | | 2007年05月 | | 武庫川女子大学バスケットボール部コーチ |
| 5. 全日本学生バスケットボール選手権大会 第6位 | | 2004年12月 | | |
| 6. 関西女子学生バスケットボールリーグ戦 優勝 | | 2004年09月 | | |
| 7. 全関西女子学生バスケットボール選手権大会 準優勝 | | 2004年05月 | | |
| 8. 日本女子学生選抜バスケットボール大会 第4位 | | 2004年04月 | | |
| 9. 全日本学生選抜バスケットボール選手権大会 第4位 | | 2004年04月 | | |
| 5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等 | | | | |
| 1. 最新スポーツ科学事典 監修：日本体育協会 分担執筆：トレーニングの原則 p. 702-704 平凡社 2006 | | 2007年 | | |
| 2. 最新スポーツ科学事典 監修：日本体育学会 分担執筆：トレーニングの原則 p. 702-704 平凡社 2006 | | 2006年 | | |
| 6. 研究費の取得状況 | | | | |
| 1. 基盤研究（C） 継続 | | 2011年 | | バスケットボールにおける即興的な攻撃戦術に関する研究：コーチの語りを手がかりに |
| 2. 基盤研究（C） 新規 | | 2010年 | | バスケットボールにおける即興的な攻撃戦術に関する研究：コーチの語りを手がかりに |
| 3. 若手研究（B） 継続 | | 2006年 | | 複雑系科学の視点を用いたボールゲームの戦術研究－プレイヤー間の関係性に着目して－ |
| 4. 若手研究（B） 新規 | | 2005年 | | 複雑系化学の視点を用いたボールゲームの戦術研究－プレイヤー間の関係性に着目して－ |
| 5. 平成16年度 科学研究費補助金 基盤研究 新規 | 共 | 2004年 | | 女子アスリートの筋力トレーニングにおける成長ホルモン分泌の影響 |
| 学会及び社会における活動等 | | | | |
| 年月日 | 事項 | | | |
| | 日本体育学会 スポーツ運動学会 日本体力医学会 トレーニング科学研究会 トレーニング科学研究会 日本コーチング学会 | | | |